僕は頭の中を蟹が横行濶歩するように思つて苦しんでゐた。
僕に食はれた蟹の恨みは、僕の精神を搔き搖るのだ。
僕はねてゐても兩脚の爪先から血液が一遍に逆流してきて、首から上は硝子のようにドロ〳〵に燒けてゐる。
ブル〳〵手足が顫えて來た。
全身が冷くなつて唇も痺れてゐる。
僕は死にそうだ。
裸になつて了つた。
『野田君、往來へ負ぶつて出てくれ』
段梯子を這ふようにして降りて、やつと閾を跨いで外に出た。
素足で冷い土を踏んで、人通りのない道の眞ん中に、僕は四月八日のおしやか樣のようにつつ立つた。
頭の上に星が二つ三つ光つてゐた。